

Title	白井浩司先生とわたし
Sub Title	
Author	岡田, 隆彦(Okada, Takahiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.376- 378
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0376">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0376</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

そのものを学んだように思う。それには教室の講義ばかりではなく、酒場での談論も共に必要であったのだ。

私は白井浩司先生との出会いに一種の運命を感じるし、自分を幸福者だと思っている。

運命といえば、私の仲間の鑑定人ロベール・マルタン氏の奥さんは、アルペール・カミュの真正正銘の従妹である。この見えない不思議な糸はどう繋がっているのだろうか。

(画商・三十六年仏文科卒)

## 白井浩司先生とわたし

岡 田 隆 彦

幸運なことに、在学中のわたしは教室以外のところで白井先生とお会いすることができた。それもしばしばである。というのも、一年生の頃から『三田文学』の編集を手伝ったからである。最初は雑役係すぎなかったが、けっこう楽しかった。当時、『三田文学』編集部は、

いまは亡き梅田晴夫氏のご好意で、八重州の梅田ビル地下の、「壽の会」の事務所に同居させてもらっていたが、わたしは、教室にいるよりはそこにいることが多く、ときおり、編集委員の諸先生のなかでもまとめ役だった白井先生を三田の研究室に尋ねるのが、学校に行くときだといった怠慢な学生だった。しかし、間もなく編集部が三田の仏文学科研究室に移転したため、わたしも少しはまじめに授業を受けるようになったが、そんな時期にもしばしば編集部員の一人として、白井先生からのご指示をおおぐために、学外での昼食のご相伴にあずかった。先生の昼食はたいい香りのよい流動食であった。

学外で何とも軽妙酒脱な、あとをにごさぬといった先生の飲みっぷりに接しながら、わたしは多くを学んだが、翌日教室に出てみると、先生は冗談もいわずに淡々と「マノン・レスコー」の講読をされたりするのだった。それでも機嫌のよいときなどは、前日に先生がお会いになった小説家や芸術家についての逸話を多少シニカルな笑いをまじえてお話しになって、授業の枕をふるの

だった。興がのると、教壇の上で細く長い両手の指が生き生きと動き出し、独特なパフォーマンスが行なわれるのだが、数人の女子学生はそれにみとれて何も耳に入らないといった塩梅である。サルトルやカミュにふれるときなど、とくにそうだった。また、佐藤朔先生がヨーロッパ留学から帰ってこられて、その直後にボードールの詩についてみごとに講演されたときのことを語られたことがあるが、臨場感あふれる話しぶりのなかに佐藤先生への敬意がにじみ出ていて、実に印象的だった。

六〇年から六三年くらいにかけての頃先生は公私ともにかなりお忙しかったであろう。やはり『三田文学』の用事で、昼近くに目黒のお宅にうかがったところ、やや頭髪も乱れ、顔色すぐれぬ先生がガウン姿で玄関に出ていらしたことがある。そのとき先生が何の屈託もなくこちらを迎えて下さっただけに、ああ、お疲れなのだからもっとあとに訪問すべきだと恐縮したものである。同じ時期に、いや、その頃から今日に至るまで先生の著述活動から教えられたことははかりしれないが、じかにお会

いしているときに、苦労話や愚痴を聞いたことがない。

最近、講演の記録「私の語学遍歴」(昭和五七年度八前期V小泉信三記念講演)を読んで、先生が暁星学園時代、作文の時間に、避暑先の逗子の縁日を見に行ったときの印象を、荷風の『ふらんす物語』の影響をもとに「蛇娘」と題して綴ったということを知り、荷風の影響こそなかったけれど、わたし自身似たような経験をしているので、改めて親近感を抱いたものである。その親近感に波及してゆき、白井浩司の都会っ子としての自己形成やそこを貫いているだろう都会的な、つまりあかぬけた感受性についてわたしはあれこれ思いめぐらすことであつた。ウルバニテを通すことはむしろんたいへんなことであるろうが、たいへんなことだと他人に気づかせないこともまたウルバニテである。白井先生の訳されたカミュの言葉に、「人間の最も自然な性向は破滅することであり、自分とともにすべての者を破滅させることである。正常な者でいようとすることだけでも、どれだけ桁外れの方が必要なことか。」という、いささか劇しいものがある

が、先生ご自身はよく承知していてもこうした劇しい言説は吐かないし、桁外れの力を他人に見せない。

わたしのごとき劣等生にも優しい先生は、卒業式の日に、「人生の日曜日／サン・グラングラン／その他の詩／レーモン・クノオと／クノオを愛する岡田隆彦に」と書いて下さった。一週間ごとに日曜日をむだにすごすのはたやすいが、人生の日曜日をすごすのは楽しいだけに難しい。どうやらわたしの場合、白井先生やクノオのようにしゃれた人生を生きるのに、いつまでもウィーク・デイをすごさねばならぬらしい。いや、日曜日を待っていること自体、すでにして野暮な人生だということかもしれぬ。

こういう先生が、他人に尽しすぎてお疲れになった最近の某日、岡田、待っている、とおっしゃった。たまたまわたしと生年月日も同じ乙女座同士で仏文学科の同窓である美しい女性のいる銀座のしゃれた店、人呼んで「石像の宴」とかいふ（とにかくいつも酔っていて正確に名前をおぼえることができないのである）にあとで行

くとおっしゃった。なのに、きちんと裏方たちに礼をいうと、わたしの前を通りすぎ、おひとり帰られた。実を申せば、その晩、優しすぎるがゆえに女人に気を配給しすぎた人物の名をも持っているらしい如上の店で、わたしは、そのときこそ楽しく、お疲れを医やしたいと思っていたのだが。共同通信社のネオンサインがいくらか明るく見えた晩のことである。

（詩人・美術評論家・昭和三十八年仏文科卒）

## 白井先生のこと

山口昌子

六月末、留学先のパリ・国立新聞研究所の学期末試験が終ったとき、ホッとした私が一番先に出かけたところは北仏の港町、ルアーブルだった。学生寮の仲間は、私が「ルアーブルに行く」というと、皆、怪訝そうな顔をした。ノルマンディーに行きたいという日本女性のMさんを同じ方角だからと半分、騙していっしょに出かけた